

東京大學百年史

部局史三

第九編 工 学 部

## 第三章 第二工学部

### 第一節 創設への準備

#### 一 第二工学部設立決定までの経緯

工学士需要の急増

昭和十二年（一九三七）に日華事変が勃発してから、社会における工学部卒業生の需要が激増して、大学では到底これに応じ切れなくなった。当時平賀讓工学部長の在任中のことで、国家の負担となる費用や設備を多くに増加することなく、収容学生数を急増しようとする案があったが、平賀部長が停年で大学を去られ、そのままになった。

その後任工学部長となった丹羽重光教授は、上記の趣旨をくみ、また前部長の志を推して、学生増募実行の決意のもとに、教授会に諮って委員会を設け、永井彰一郎教授を幹事として案を練った。その結果、収容力を二倍とする二部教授案や、収容力を約四割増とする案などを得たが、教授会は後案を採択した。しかし如何に時局のためとはいえ、これを恒久的に行うことは困難であり、学生増募は臨時とし、かつ二回だけとした。教授会はこの実行案を採択したので、丹羽工学部長から当時の長与又郎総長に提出し、総長も賛意を表した。文部省もまた了承し、昭和十三年から臨時増募を二回実行し、約一三〇名の定員増となった。

しかし、時局はますます多難となり、工学士の需要も増加する一方で、恒久的の傾向が現れてきた。そこ

で丹羽部長は教授会に諮って、青山秀三郎教授を幹事として、工学部の恒久拡張案を練った。その結果鉱山と火薬を除いて全学科の拡張を行うべしと委員会の意向が決した。丹羽部長の考えは、単なる工学部の拡張ではなく、別に第二工学部を東京帝国大学の機構内に設置するものであった。しかしながら、この案は昭和十六年度に提出されたが、文部省は認められたもの、大蔵省の容認は得られなかった。

## 二 設立決定

一方、昭和十六年（廿五）一月三十日、企画院で緊急会議が開かれ、本学、文部、大蔵、陸軍、海軍、企画院の関係協議会が行われ、東京帝国大学に第二工学部を設立するむね決定した。発端は昭和十六年一月末、海軍から平賀総長に、工学部の卒業期を三カ月早くしてほしい要請があったことと、さきの第二工学部案の不成立にあった。第二工学部の創設に必要な資材は陸海軍が折半して引き受けることが提示された。これをうけてはやくも同年二月初旬には、設立に要する創設費を、昭和十六年度追加予算として、帝国議会に提出することが、閣議の決定をみた。この追加予算は臨時費一年分三、〇八〇、〇〇〇円、総額一二、七〇〇、二〇〇円の四年継続事業として、同年三月正式に成立をみた。

## 二 設立の準備

第二工学部の創設費を昭和十六年（廿五）度追加予算として、帝国議会に提出することが閣議の決定をみたので、丹羽工学部長は総長の命をうけ、その設立の準備に必要な事項を協議するため、昭和十六年二月十九日、工学部各学科の左記長老教授を集めて、とりあえず「第二工学部設立準備相談会」を開催し、構想の説明と設立準備のための協力を懇請した。

## 設立準備相談会

山本武蔵（船舶）	湯浅亀一（機械）
青木保（造兵）	宗宮尚行（応化）

内田 祥三 (建築)      中西 不二夫 (応力)  
草間 偉 (土木)      池田 謙三 (冶金)  
厚木 勝基 (応化)      真島 正市 (造兵)  
瀬藤 象二 (電気)      小野 鑑正 (航機)

第二回相談会は、昭和十六年二月二十二日開催された。幹事は理工学部教官から、各科一名ずつ選び、学科課程および時間割、建築の新営、建物の標準などを定めた。

第三回相談会は、昭和十六年三月三十日開催され、教授、助教授の人選の原則などで、第一年度の人選は六月末までに内定することに努力することを決めている。都合三回開催された相談会は非公式ではあったが、第二工学部設立準備の基礎となったものである。

昭和十六年三月十四日、正式に発足した設立準備委員会の第一回会合が開催された。総長から経過説明あり、昭和十六年度より四カ年継続、総額一二、七〇〇、二〇〇円で、昭和十七年は学生を収容する、建築費設備費はかなり削減され、坪単価一八〇円、付帯工事費坪六〇円と査定されたため、単価を上げて、予定坪数の四分の三の一三、五〇〇坪を見込む、などの報告があった。また本席上、第二工学部の学部長予定者として、瀬藤教授が紹介された。

第二回委員会は、昭和十六年七月八日開催され、総長から、本学記念日に第二工学部の設置と敷地が確定したことの発表を行った旨報告があり、土地は千葉市新市内の一四七、〇〇〇坪で、建築について第一回の入札を七月七日に行い、いよいよ緒についた由報告があった。

第三回委員会は、昭和十六年十月一日開催され、内田委員長から第二工学部の学科課程について報告があった。また、昭和十六年十月勅令をもって大学学部の在学年限を当分、六カ月以内短縮することが定められ、第二工学部は、最初予定していた昭和十七年四月入学に加えて、同年十月にも入学させる必要を生じた。

## 三 敷地と建設

第二工学部は、東京大学の機構の中に設けるため、敷地の選定は、急を要する第一関門であった。最初は本郷以外に合計七カ所の候補地があり、検討の結果千葉市新市内の東京寄りに決定をみた。これには千葉医大、千葉市、千葉県からの誘致があったことと、当時東京帝国大学は、千葉市検見川町に総合運動場を建設中であつたことが相乗し、選定理由の一つともなつた。総面積は一四七、〇〇〇坪で、民有地は千葉市が買収にあたつた。千葉市から寄付を受けた土地は二五、〇〇〇坪である。

第二工学部の新営費は四カ年計画として五、八〇〇、〇〇〇円の中、教室・実験室は三、二四〇、〇〇〇円で、一八、〇〇〇坪、要求のコンクリート造は認められず、すべて木造二階建ペンキ塗屋根瓦葺の質素なものであつた。昭和十六年七月七日、中央事務室関係建物の入札を最初に、次々に建設工事に付された。しかし資材、輸送、労力の不足で延引し、十七年四月の開学に間に合つた建物は、中央事務室、講堂、学生食堂、機械第一号館、土木第二号館、船舶第一・二号館の七棟にすぎず、相互に融通する方策がとられた。

## 第二節 第二工学部の発足

## 一 開学当初の第二工学部

昭和十七年（二五三）三月二十四日、三つの勅令が公布されていずれも昭和十七年四月一日より施行されることになり、ここに本学第二工学部の設置が公式に確定した。